

今日も続く、私たちのワープロドライブ

ロバート・A・ジェイコブズ

私たちは、核の世界に生きている。誰もが核という（核の傘ではなく）ダモクレスの剣の下にいて、いつ、核によって全滅してもおかしくない状況にある。また、私たちはすでに放射能に汚染された環境にどっぷり漬かっている。広島と長崎に原爆が投下されてから、2,000回以上の核実験が行われた。いずれも人間への直接的な攻撃ではなかったものの、これらの核実験、特に水爆実験からの放射性降下物を含んだ雲は、世界中に放射能を拡散させた。核実験により放出された放射性核種は、北極、マリアナ海溝、エベレストでも検出されている。至る所に存在するため、避けることは不可能だ。それに加え、核兵器や原子炉に使用される原料の生産、ウランの採掘や精製、そしてプルトニウムの生産からも、多くの放射性粒子が、土壌や空気、海に拡散しているのだ。チェルノブイリ（チェルノブイリ）やフクシマのような原発事故や、一般に知られていない数多くのその他の核施設関連の事故が被害を拡大させている。核の歴史のほとんどは目には見えない。蔦谷は、その歴史を可視化することに精力的に取り組む、私たちにも見えるようになる方法を見つけた。

蔦谷の芸術は、観る者を意味と視覚の美的な世界に没頭させる。歴史上の特定の時期や出来事を深く掘り下げ、その歴史を視覚的な物語の形で表現した作品は、私たちが生きる今この瞬間と未来に遭遇し、交わることを可能にする。

蔦谷の作品は、核の歴史のあまり知られていない側面を丹念に描いており、幾多の要素を突き詰めることで、全体像を具象化しようと模索する。蔦谷は、私たちの核技術や原子力との向き合い方や操り方を、包括的な視野で捉えている。彼女は、歴史的調査に基づき、独自の視覚的な言語から生み出された「エコシステム」を創り出した。実際に起こった出来事や力学に忠実でありながらも、この歴史を、かつて起こったこと、そして今なお起こりうることという夢へと解き放つ。蔦谷は、私たちの核にまつわる物語の受け止め方や継承の仕方を改めて見直させてくれる。

様々な生物が登場する蔦谷の作品は、私たちが囚われがちな国籍や人種といった枠組みから解放されている。その代わりに、蔦谷が創り出す生物は、それぞれの行動、すなわち核の歴史を描いた物語における役割によって分けられている。それは動物だったり昆虫だったりもするのだが、重要なのは何をやるかであって、どんな名の下で行動するかではないのだ。一般的に、核の歴史は国家や人種に分けて学ぶことが多いが、行為を行った者と受けた者という視点で考えること

で、より明確に歴史を捉えることができる。核の歴史から国家という枠を外すことは、私たちを受け手、または継承者として、共通の位置に立たせる大胆な試みである。科学者たちは、私たちの能力を前進させて、より調和のとれた生活を送れるようにしてだろうか。政治的指導者たちは、平和な社会を実現するために行動してだろうか。そして、軍事的指導者たちは、私たちの真の安全保障について考えたのだろうか。私たちは今、核兵器、原子炉、核廃棄物がもたらす脅威の中で生きている。国籍や人種によって分けることは、私たちの集団的リスクや、子孫たちに引き継ぐ世界中の放射能汚染を考えれば、もはや意味をなさない。蔦谷は人類がたどる道のりを私たちに示している。彼女の作品から、私たちは人類が直面している困難な状況を理解できるのだ。

しかし、常に作品は美しい。優美な構図、実物さながらのスケルプチャー（彫刻）、そしてハイブリッド生物が、私たちの生態系と同じように、マルチメディアのエコシステムの中で織り交ざっている。蔦谷は、身近でありながら夢のようでもある視覚的な言語を生み出し、核の脅威にさらされた現実世界にある伝説性を私たちに突きつける。

「デイリードローイング：くものいと」は、ただただ素晴らしい。一日に一枚ずつ、複雑なドローイングを次々と描き上げ、核兵器の開発と人間に対する使用という複雑なストーリーを伝えている。科学者、軍の指導者、労働者、生産工場の近くに住む被害者、標的となった子どもたちや両親、祖父母など、様々な人々がそれぞれ集団として紡がれている。深い思いやりと、明晰な描画を駆使して描かれた日々のドローイングを通じて、奥深いニュアンスを持つ歴史が語られる。この作品は私にとって、最も深遠に広島・長崎への原爆投下の歴史を語るものである。科学技術をやみくもに礼賛し、人間の存在を見えにくくする歴史の解釈よりもはるかに、心を動かし、示唆に富んでいるからだ。核兵器の歴史は、人間が人間をどう扱うかの歴史であり、いかに高度であっても技術は二の次でしかない。蔦谷は、核の歴史が安全保障研究の歴史ではなく、社会的な遭遇の歴史であることを理解している。

《エノラズヘッド（ENOLA'S HEAD）》で蔦谷は、原子炉や核兵器の開発や製造の歴史、生産現場にもたらした被害、広島と長崎への原爆投下、そこに暮らしていた人々への影響、そして環境に与えた影響を、多角的な側面から描いている。2次元のドローイングの世界に、動物や植物、昆虫の頭部を擬人化した3次元のスケルプチャーを加え、これら2つの世

界を結びつける「エノラ・ゲイ」の模型を作った。そして、実写、ナレーション、音楽を組み合わせ、動き溢れるデジタルフィルムに織り込んでいる。これはまさに傑作である。物語の内容もさることながら、作品の美的な大胆さと包括性にも圧倒される。「核の時代」の起源となった伝説的な出来事による放射能汚染。その傷痕が残るこの世界で、私たちは、静かに、自らの歴史とともに生き続けるしかない。

《Study with the Moon》では、スミソニアン博物館で復元され神格化される前に、放置されていた爆撃機エノラ・ゲイの夢の中に入り込む。多くの神々が月の欠けゆく時期に満月の夢を見るように、エノラ・ゲイも、自分が輝き、世界の注目を浴び、満たされていた頃の夢を見る。太陽のように光り輝き、雨を黒く染めることができたあの時。誰も背を向けることができず、誰も逃げるができなかったあの時を。

《Beautiful Sky Golf Course》では、私たちが置かれた真の状況を捉えるには、世界を国家という枠から外して理解しなければならないが、常に国籍や民族、人種といったレンズを通して世界が語られてきたということを指摘している。アメリカは自らをメルティング・ポット（人種のるつぼ）でありたいと夢見ているが、そのポット（るつぼ）には常に内側と外側があり、アメリカ人の一員として溶け込むことを歓迎される人たちと、人生の物語がどんなにアメリカンドリームを映し出していたとしても排除される人たちがいる。戦時中、収容所に閉じ込められた日系アメリカ人の一世は、排除に対して、自分たちにできる最もアメリカらしいこととして、ゴルフコースを作る。フェンスと武器に囲まれて、監視の下で楽しいゲームを行う、美しいゴルフコース。それは、アメリカが思い描くよりもっとリアルなアメリカンドリームだ。物語はドローイング、スカルプチャー、布、実写やビデオで語られる。人々が望む安全な生活、家族のささやかな未来という夢に、その他の人々が抱く、暴力によりもたらされる防衛、（権利の）侵害、そして安全という夢が組み合わされる。これは人間と人間を分断する夢。残酷性をはらんで眠る夢。最終的に、何千人もの学校の生徒たちへの核攻撃へと至る夢である。

私たちは夢を見なければならぬが、同時に目を覚まさないといけない。

蔦谷は、自身が持つイメージに私たちが出会えるよう建物を作った。戦時中の（日系人を抑留する）収容所と、広島や長崎に建てられたバラックを模した家屋のように、私たちが今生きている世界もまた、核の時代の灰塵の中で築かれたものだ。世界各地で行われた核実験により、地球上のあらゆる場所に放射性粒子が拡散している。2011年の調査では、長

崎の爆心地から2.3kmの地点において、1945年の原爆投下による放射性核種よりも、世界的な核実験による放射性核種の方が多く検出された。私たちの世界は、核の時代にもたらされた灰、悲しみ、粒子でできている。建物の壁には、蔦谷の映像が夢のように繰り返し流れている。私たちは、これらの世界を結びつける生き物だ。戦争で戦い、武器を作り、憎しみと暴力に苦しみ、苦しみを与える側にもなった。私たちは自分達が築いたこの世界に戻り、横たわらなければならない。そして、目を覚まし、過去の教訓を学び、よりよい世界を築けるといふ、これまでとは異なる世界で子どもたちを育てていかななくてはならない。

私たちと子どもたちが、このような認識を共有しなければならない根本的な理由は、たとえ明日、核兵器を廃絶し、原子炉を廃止したとしても、長寿命の高レベル放射性廃棄物は何千世代にもわたって私たちの子孫を危険にさらし続けるからだ。現在、すでに何十万トンという廃棄物が世界各地に保管されている。それは今後何十万年も消えることはない。これは、人類社会がこれまでに生み出したものの中で最も頑丈で、私たちの都市や文化をはるかに超えて存在し続ける。私たちは、この歴史を子どもたちに伝えなければならない。そして、核の時代に自分たちの社会が生み出した脅威について深く認識し、地球上でどのように生きていくかを身につけなければならない。蔦谷の芸術の世界は、この歴史と運命をわかりやすい視覚的な物語に変え、それが語り継がれ、存続し続け、伝え続けられるようにするための欠かせない一歩なのだ。

この作品の根底には、人間が耐えてきたもの、受け継いできたもの、そして残してきたものなど、人間に対する思いやりの心がある。この展示の周りを歩きまわってみよう。そして、たっぷりと空想してみよう。自分がどこから来たのか考えてみよう。他の人たちはどこから来たのか考えてみよう。私たちは皆、どこへ向かっているのか考えてみよう。そして、もう一度周りを見回して、画像やスカルプチャー、動画、建物を見てみよう。この瞬間、この場所が過去と未来を結んでいる。あなたを通して動いているのだ。この作品を自分の中に取り込み、次の一歩を踏み出そう。さあ、ここから築いていこう。しっかりと目を開いて。

ロバート・ジェイコブズ

広島市立大学広島平和研究所および同大学院平和学研究科教授。原子力技術と放射線技術政治学の歴史家。著書『Nuclear Bodies: The Global Hibakusha』（イェール大学出版局、2022）は、世界の核兵器実験、製造、および事故による放射線への個人や地域社会の被曝／被曝の影響について、20カ国以上で10年以上にわたる調査の内容を紹介している。核の歴史と文化に関する書籍や論考の執筆多数。もとはシェフとして有機農産物業界で働いていた彼にとって、学術研究はセカンドキャリアである。